The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	質問２：〈自分の問題〉との距離のとりかた
Author(s)	吉田，裕香
Citation	臨床哲学ニューズレター．2023，5，p．51-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90069
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集２　第７回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけられる声を聴く）
テーマ「研究者になるということ：研究者と当事者のあいだで」

質問２：〈自分の問題〉との距離のとりかた

吉田　裕香

私は、「自分で、自分に、発達障害／精神障害の名前をつける」という、「自己診断」とよばれる経験をめぐって、自分に病名をつけながら、医療や支援の場には行けない（行かない）人びとに関心をもっていて、かれらが他者と関係をもちながらも、生きづらさをオープンにしないまま生きぬく技法について考えたいと思っています。

今回は『当事者は嘘をつく』、特に第５章を中心に、私自身が研究において戸惑いや行き詰まりを感じることにも重なる箇所について、小松原さんにお伺いしたいことを以下の３点にまとめました。

① クローゼットのまま研究することについて
② 個人的・実存的な問題にかかわる研究を、どう社会制度の問題とつなげていくか
③ 「当事者」ということばの扱いづらさについて

① クローゼットのまま研究することについて

私の研究を、本書のなかでの小松原さんのことばを借りて言いかえれば、障害にかんして自分はなんらかの当事者性をもつと考えている人びとが、「クローゼット」のまま、「「ふつうの人」として擬態」（113 頁）したまま、どう生きぬいていくかを考える、ということになるかと思います。「私は性暴力被害者です。そして研究者です」 と、「名乗ることが当たり前で、悩みでもないような社会」（114 頁）ではないという問題は、私が関心をもつ、人びとが自分の生きづらさをオープンにしない／できないという状況にも深くかかわっていると思います。研究者が当事者性の強い問題を研究するときにも、小松原さんがふれられていたように、回復途上であったり、支援者からのまなざしの問題であったり、甘えであったり、さまざまな理由でクローゼットのまま研究を続ける研究者がいるのではないかと思います。研究者が、当事者を一方的に代弁・分析したくない、けれど当事者だと名乗ることができないという葛藤に向きあって、それでもクローゼットを選択する（選択せざるをえない）ときに、クローゼットのままでありつつも当事者（研究する相手）を裏切らない・搾取しないというありかたは考えられるでしょうか。それとも当事者を裏切らないためにはカムアウトの方向に進むよりほかないのでしょうか。もちろんカムアウトすればすなわち搾取や裏切りでなくなるということではないとは思いますが、クローゼットのまま研究する際の

問題を解消する方法は、カムアウト以外には考えられないかという点をお聞きしたいです。また、カムアウトするか否かというときに、（アカデミズムのなかにいる）研究者と当事者という二つの自己をもつからこそ起こりうる、研究者特有の問題にはどのようなものがあるでしょうか。

② 個人的・実存的な問題にかかわる研究を、どう社会制度の問題とつなげていくか

第三章に、小松原さんご自身が自助グループの経験をつうじて「性暴力について、自分の哲学的・実存的な悩みから、急速に思考の方向を転回して、社会制度の問題へと」（52 頁）視点を移された、というお話がありました。私の研究は、まさに個人的で、哲学的・実存的なものについての研究だと思うのですが、そういった個人的・実存的な問題にかかわる研究にこだわりながらも、社会制度の問題や構造的な問題に接続していくという道があるのではないかと私は考えています。しかしながら今のところ、自分の研究からは社会を変革する、制度の問題を考えるといった部分が見えてきません。制度や社会の問題を考えなければならないという思いはありますが、それはあくまで義務感であって、心の底から湧き上がるようなものではありません。そのために自分の研究と社会制度をうまく接続できないのだと思います。小松原さんは個人的・実存的な問題にかかわる研究と社会制度の問題の接続について、どうお考えでしょうか。接続してしまうことの問題点も含め、お伺いしたいです。

③ 「当事者」ということばの扱いづらさについて

「当事者」ということばそのものに、私は馴染めなさと扱いづらさを感じてきました。私が研究においてかかわりたいと思っている人たちの多くは、診断をもたないために「当事者」だと名乗ることが難しく、また、かれらが「私は当事者だ」と名乗ることが、意図せずともかれらをより苦しい立場に追いやったり、（かれらとは別の／かれらも含めた）「当事者」に対する偏見を強めてしまったりすることがあるからです。加えて、たとえば私が論文のなかで「当事者」という概念やことばを用いることによって、「当事者とは誰か」ということを規定してしまうのではないか、という怖さもあります。私が用いる「当事者」ということばが誰かを排除してしまうのではないかということが気になって、私は「当事者」ということばを使うのを避けてしまいます。

小松原さんの研究と私の研究では状況が異なる部分も多くあると思うのですが、小松原さんは「当事者」という概念・ことばとどのようにかかわっていらっしゃるのか、研究のうえで留意されている点などあればお伺いしたいです。

（よしだ・ゆうか）